

[千年を癒やす者]

ザーメンまみれのソシエの背。

「——祓之舞・浄火——！！」

蒼白く輝く焰が天高く上がり、魔物に降り注ぐ。

(浅いっ——…！)

しかしソシエの放った奥義を、その魔物は易々と避けてみせた。
反撃を辛うじて躲し、ソシエはしゃんと扇を構える。

「っ——…！」

ソシエは僅かに顔を歪めた。
地盤が悪く、少し足を痛めた。
その息は荒く、体力の消耗は激しかったが、姿勢は崩さなかった——。

分かってはいた。
とどめを刺すには早い、と。
それでも奥義を放ってしまったのは焦りからに他ならない。

ソシエは後方に控える仲間を視界に捉えた——が、その支援は期待できそうにない…。
彼とは今日一日、共に戦ってきたが、連携はことごとく上手く行かず、今、目の前にいる魔物にはほとんどダメージを与えられていない。

「グルルル——ッ」

やっとの思いで魔物の体に纏わせた狐火が——…小さくなって消えた。
打つ手がない。

戦力不足——、その一言に尽きた。

(ああ……、ここにユエルちゃんがおったら——……)

ソシエは心中でこの場にいない親友を思った。

魔物との睨み合いは続く。

体力が残っていないこちらとは違い、魔物はほとんど無傷である。

ソシエの首筋に嫌な汗が伝う。

騎空士をやっている以上、いつかこういう場面に遭遇することは覚悟の上——…

が、次の瞬間、魔物は身を翻すと森の中へと消えていった。

(うちら……、助かった…ん……?)

ソシエは完全に魔物の気配が消えるのを待ってから、溜息を一つ吐き、扇を下ろした。

安堵の溜息だった。

「ソシエさんっ…、大丈夫でしたか？お怪我は…？」

「うちは大丈夫……、クロバはんは…？」

「自分は大丈夫です、それより、すみません、自分の動きが悪いばかりに……」

「そないなことあらへんよ…、ちょい連携があんじょういかなかったやけやから…」

「いえ、自分が悪かったんです…、貴女の動きについていけなくて、

足を引っ張ってしまいました。誠に申し訳ありません……」

ソシエは騎空士として受けたこの緊急の依頼を、初めて会ったクロバというヒューマンの男と2人だけで遂行していた。

ある島に突如魔物が溢れ出し、既に何十人もの住民が犠牲になっているのだという。

本来なら親友であるユエルとともに受けたかったが、その時、運悪くソシエは出先で一人だった。

その島はかなりの辺境に位置し、交通手段は半月に1度の定期便があるくらいで、もし今きているその便を逃すと足がなくなる。グランサイファーに戻り、団長にお願いすれば快く艇を向けてくれるだろうが、その間、団全員を拘束してしまうのは気が引けた。

一応、他の騎空団も現地に向かっているという話だったが、戦力の程は不明らしい。

ソシエは少し悩んだが、その緊急依頼を受けることにした。

それは犠牲者を増やしたくないという純粋な人助けの気持ちからであったが、たまには一人で依頼を受け、他人と接することが不得手な性格を改善する機会になると思ったからでもある。人懐っこい憧れの親友に少しでも近づくために。

しかしいざ現地で合流できたのは、クロバと名乗るただ1人の男だった。

どこか物憂げな、少し影の感じられる男だったが、彼もまたソシエと同様に騎空士で、その肉体は一目で鍛え抜かれた戦士だと分かった。大刃のバスターソードを軽々と扱う様子から、彼が魔物を華麗に薙ぎ払う姿を思い浮かべるのは難しくない。

しかしいざ魔物との戦闘が始まるとその動きは鈍く、剣の切れは悪かった。

息もすぐに上がっているようで、スタミナが続いていない。

殆ど前に出ようとしなため、連携が上手くとれない。

挙げ句、ソシエ、クロバ、両者ともに極端な口下手だったため、言語による意思疎通もままならなかった。それでも2人は、なんとか魔物たちを退け続けたのだった。

最後のボス、一頭を除いては。

「クロバはん……、今日はいっぺん街へ降りて……あすまた来いひん…？」

現戦力での野宿は危険だ。

早めに街へ戻り、一度体勢を立て直した方がいいだろう。

2人は最低限の会話のみ交わすと、重い足取りで麓の街へと戻った。

魔物の大部分は退治できたという報告に、街の人々はとても喜んだのだが、2人の表情は暗い。一番倒さねばならない群れの頭を逃がしてしまった。

早急に退治しなければ、いつ次の犠牲者がでるか分からない。

いまだ増援の知らせは無く、明日もまた2人で討伐に向かわなければならないようだ。

その辺の魔物なら個人技でなんとか対処が可能だ。

しかし、あのボスだけは、他とは格が違う。

あれをソシエとクロバの2人だけで退治するためには、連携が必要不可欠なのは明白だった。

2人とも心の中ではそう思っている、のだが―――。

部屋に運ばれてきた食事も食べ終わろうという頃、ソシエが口を開いた。

「クロバはん…、もしかして、何や悩んでるんとちゃうの……？」

「……」

「もし、悩みごとあるんやったら…、うちに話してみいひん…？」

友達にユエルちゃんておるんやけど、うちもいっつも話聞いて貰っておるんよ……

うちがクロバはんの力になれるか分からんけど、

口に出したらちいとは楽になるかもしれへんよ…？せやから―――」

「……………っ！！」

ソシエ…さん…、少し、お酒を、頂いてもいいでしょうか…？」

少し酒を入れたクロバは、ぼつりぼつりと話し始めた―――。

彼はもともと、今とは別の騎空団に所属していた。

そこには同じ騎空士である恋人がいて、気の置けない仲間たちがいて、危険な仕事は多くても、充実した幸せな日々を送っていた。

ゆくゆくは彼女と結婚を——と、願っていたが、幸せな未来は突然崩れ落ちる。

ある日、彼は恋人の浮気現場を目撃しまったのだ。

相手は同じ団の仲間だった。

彼は恋人と仲間の裏切りに衝撃と動揺を抱え、何も言い出せないまま鬱々とした日々を送り——……

ついには最悪な展開を迎えることになった。

恋人を寝取った仲間に、後ろから斬りつけられてしまったのだ——……。

辛うじて生き延びはしたものの、彼に残されたのは復讐心や怒りではなく、虚しさと絶望だった。

生計のため別の騎空団に入り、騎空士を続けようとはしたものの、背後から仲間に切りつけられた過去が彼の心を蝕み続けていた。どうしても仲間を信じることができない。信じられないから連携が乱れる。

本領を發揮できないまま、団内での彼の評価はどんどん落ちていった。

もともと今回の緊急依頼も3人で受けると聞いていた——ののだが、彼1人だけがこの島に残された。

「置いていかれた…、つまり解雇通告だな……」

「そない…、えげつないこと…」

「ソシエさん、貴女のことを信じていないわけじゃないんだ……、本当だ…。

グランサイファーの声望は耳にしているし、君が騎空士として相当な実力を備えていることも分かっている。だけどっ——、どうしても…

どうしてもっ…ダメなんだっ……、

誰かに後を任せると、足が竦んでしまうんだ……っ…」

それは…、仲間に背中から斬られれば、無理からぬことかもしれない……。

クロバは両手で頭を抱えて縮こまった。

鍛え抜かれた戦士の巨軀は、とても小さく見えた。

ソシエは、立ち上がり彼の隣へと座る。

奮える肩に手を伸ばし——、そっと戻した。

なんて声をかけたらいいのだろうか——……。

「すまないっ、俺もう、誰も信じられないんだっ……、

こんなの甘えだっ、分かっている、でも、ダメなんだ……

俺にはもう…、騎空士を続ける資格がないっ……」

(そないなことない——！！)

こん依頼を断らず、こうしい残ったんは……、
裏切られても、他人を信じられなくても、
ほんでも困ってる人々を助けたいと思ったからやないの……。
クロバはん、そん気持ちになによりも大事なんよ——…)

そう言いたかったのだが、言葉にできなかった。

確かに気持ちは大事だ。

しかし気持ちだけではどうにもならないのが騎空士なのだ。

実力のない騎空士は、人も、仲間も、自分さえも守れず、ただ散っていくだけ。

「すまない…すまない……っ…」

(ユエルちゃん、うちどないしたらええの………)

九尾の器として死ぬ運命を課せられたコウ、その代用品として育てられたヨウ——…

とても小さな2人が背負わされた、あまりに過酷な運命を目の当たりにしたばかりでは、『その程度のこと』という思いが全くないと言えば嘘になる——が、肉体を鍛え上げた大の男が膝を抱え、最早、誰も信じられないと、暗闇の中で蹲っているのだ。

この人は、この人で、コウやヨウと同じように、絶望の淵に立たされているのだ。

彼がこのまま騎空士を続けていけば、近い将来、きっと命を落としてしまうだろう…。

そんな未来を避けるには、騎空士をやめて別の道を探すか、立ち直ってもう一度戦えるようになるか——、そのどちらかしかない。

(ちゃう…、ちゃうよ……、

コウ君、ヨウちゃんかて救えたんやから、きつとこん人のことかて——)

ソシエは齒がゆさに着物の裾を掴んだ。

そしてはっと目を見開く。

その日ソシエが着てきたのは母から譲り受けた『快癒の舞』のための衣装だった。

それはまさしく他者を癒やすための衣装に他ならない。

ただ一つ欠点をあげるとすれば、『快癒の舞』は舞手の体力を非常に消耗するということだ。

普段ならばともかく、今日、そして明日もまた激しい戦いが見込まれるこの状況で舞うにはリスクが高い。

(そやかて、そないなこと言うてる場合やあらへん——！)

まずは体だ。体力が戻れば気力も戻る。
溢れるほどの活力が漲れば、再び顔を上げ、前を向く勇気も持てるかもしれない——！！

「クロバはんっ——！！」

ソシエは立ち上がり、扇を手を取った。
部屋は決して広いわけではなかったが、高天井でぎりぎり舞うことはできるだろう。

「はっ、はい……、すみません、俺、みっともないところをお見せして…、
ソシエさん！？」

「クロバはん、あんさんの心もっ、体もっ、ぜんぶうちが癒したるっ——！！」

「えっ……！？」

ソシエは舞った。
快癒の舞を。
それは秘島ミマカで、動かなくなったコウの脚を治すため舞った時以来だろうか——。

「クロバはん——、下を向いとったらあかんよ…

クロバはんが恋人や仲間を裏切ったわけではないんよ……

そやのになんで、なんで、あんさんが下を向いてなきゃあかんの——？！」

「ソ、ソシエさんっ……」

「クロバはんっ——！！」

「うおおおおお———…！！！」

クロバは無意識にあげた自分の雄叫びに、いつのまにか身体の奥底から信じられない程の活力が溢れ出ていることに気付いた。そしてその理由が、目の前のソシエの舞にあることにも。

と、不意にソシエがバランスを崩し——たが、クロバが素早く前へ出て受け止める。

「ソシエさんっ、大丈夫ですか！？」

「はぁっ、はぁっ…、快癒の舞——、意外とこれ、体力使うんよ……」

「すみません、自分の為に、俺頭では分かっているんです……、

でも、もう、裏切られるのが怖くて……」

「うちは、裏切らへんよ…」

「あぁっ！ そうか、今回の依頼、失敗するわけにはいかないですからね…。

だからソシエさん、こんな俺に優しくしてくれるんですよね……？」

ソシエは寂しそうに首を横に振る。

「本当にこんな俺を受け入れてくれるんですか……」

「受け入れる。うちはクロバはんに、元気になって欲しい、ただそれだけなんよ——」

クロバは脱力したままのソシエの身体をそっと部屋の柱に預けると、立ち上がってベルトを外しはじめた。そしてズボンを下ろし下半身を露出する。

ボロン——

「ソシエさんっ、見てくれ！！

おかげでこんなに元気になりましたよ！！」

「ひっっ……」

不意に変な声が出た。

突然、目の前に突き出された黒棒、あまりの突拍子もない展開にソシエは頭の中が真っ白になった。

これまでの会話で、このような展開へと繋がるようなやりとりをした覚えが一つもない。

何の間違いかと思案するソシエの頭はがっしりとクロバに掴まれ、その唇には赤い亀頭を押しつけられた。その鈴口から汁が垂れ、まるで自分を食べようと涎を垂らしているように見えた。

一言でいえば、グロテスク。

ソシエは今までそんなものは見たことがなかった。

ユエルがコウに悪戯するのは日常的光景で、勃起したコウのモノを何度かチラ見してしまったことはあるが、それはどちらかといえば、とても可愛らしいものだった。それこそ、悪戯心が芽生えてしまいそうな程に。

しかし眼前に突き出されたソレは、同じ男性器であるはずの股間から聳え立つソレは、コウのモノとは完全に別物だった。

大きさが違う、色が違う、形が違う…、何もかもが、違う……。

黒々と伸びる先には巨大な亀頭を掲げ、支える竿は血管を浮き上がらせ、激しく反って屹立し、天を仰いでいた。

「クロ…バ…は…んっっ……んっっ…」

「口を……開けて……、

ソシエさんっ……、受け入れてくれるなんて……やっぱり嘘だったん——」

「ちがっんんっっ——！！！」

まったく状況を理解できぬまま、ソシエは口を開き、その割れ目から肉棒が突き刺さった。黒い肉の塊は、ぐいぐいとソシエの口内に侵入ってくる。

「ん` ごっ…ん` っっ——！！！」

確かに受け入れるとは言った。

けれど、陰茎を口に、という意味ではない……。

クロバはソシエの頭を掴んだままゆっくりと腰の抽送を始め……、やがて陰茎がソシエの唾液で濡れてくると次第にその速度を上げた。

「んんっ——！！！」

口を犯されている——と、ソシエはようやく理解した。

「もっと、唾液を、出して——」

快癒の舞の脱力から回復していないソシエにできた抵抗といえば、口の中のソレを噛むことくらいしかなかったが、ソシエにそれを実行する選択はなかった。だから仕方なく、言われるままに、唾液を絞り出す。

ぢゅぽっ——

ぢゅぽっ——

ぢゅぽっ——

ソシエの唾液に濡れた陰茎はどんどん滑りをよくし、口を犯すスピードが上がっていく。

陰茎が口内を犯す度、ソシエの脳内にはじゅぼじゅぼと音が響き、そしてそれはまるで、ソシエの中の何かを、ぞりぞりと削り取っているかのような音に感じた。

不意に、クロバの腰振りがゆっくりとなる。

「ソシエさん、さっきは俺、裏切られるのが怖いって言ったけど……、

本当はそれよりももっと、拒否されることの方が怖くなってたんだ……」

「んぐっん……」

「俺、恋人の浮気現場を見てしまったって言ったけど……、

その時、彼女、仲間の前に膝をついて、こんなふうにしゅぶってたんだ……」

口に押し込まれた陰茎は太く、声を出す隙間さえなく、ソシエはただ黙って聞くしかない。

「俺が何度も口でして欲しいって頼んでも、絶対にしてくれなかったのに———…、

あいつは……、あいつの前に膝をついて…あいつのモノを口でしてたんだ……」

「んんっ———…！？」

「別れてからも、その光景が何度も、何度も、何度も、何度も、フラッシュバックしてきて、

俺はいつのまにか、裏切られることより、拒否されることの方が怖くなって……」

「んんっ………、ふほははん（クロバはん）……」

静かに語るクロバは抽送をやめ、少し落ち着いた様子を見せたため、ソシエは彼の腿をポンポンと軽く叩き———…、それから押して引き離そうとしたがびくともしなかった。

「だからソシエさんが———口に出したら楽になるかもって言ってくれたとき…

確かにその通りに違いないって…、そう思えたんだ…」

「んんっ———！！」

クロバは再び腰を振り始める。

ジュポッ———

ヂュポポポッ———

ジュポッ———

ぢゅぼぼぼっ———

ヂュポッ———

ヂュポッヂュポッヂュポッヂュポッ———

クロバの腰振りはどんどん早くなり、ソシエの口を使って上りつめていく。

ソシエは何もできず、顔を苦痛に歪めながら口を犯され続ける。

「ううっ、出すッ———出すよ、ソシエさんっ———！！」

「んんっうう———！！」

ソシエはなんとか逃れようと両腕に力を込め、引き剥がそうとしたがやはりびくともしなかった。

びゅるっ———ビュルルルッ———

ドピュ———ドピュ———…

ソシエの喉奥に熱い粘液が溢れ出る。

ビュビュッ———ビュルルッ———

「飲んでっ——全部飲んでっ——！！」

ソシエはなぜ、どうして、今このように口内射精されるに至ったのか、その過程がまったく理解できなかったが、混乱する思考とは裏腹に、身体はどこか、熱く、しかし、ふわふわと浮ついたような感覚が——

「ごくっ——、ごくっ、ごくっ——んんっ…」

ソシエは喉奥に逆る熱い粘液を飲み下す度、下腹部に疼きを感じていた。

食道を通る精液から、なにかが体中に広がっていくような——…

理解のできない火照り。

ソシエは本流が終わると、舌を動かしてそれを舐め、自ら頭を振ってそれを吸った。

唇で陰茎を扱くたび、頭が痺れ、体中になにかが走るのを感じた。

決して、嫌な感じではない。

それはどこか、心地良い痺れ。

触れて欲しい——、体中に触れて欲しい——、

体中を——…、突如そんな欲求が湧く。

「ソシエ…さんっ……………」

喘ぎにも似たクロバの声に、ソシエははっと我に返って見上げた。

いつのまにか頭をがっちりロックしていたクロバの手はなく、ソシエはいつでもソレから口を離すことができる状態だった。

「はあっ…はあっ…はあっ…」

我に返ったソシエは恥ずかしさに顔を真っ赤に染めながらも、その舌は名残惜しそうに口内に残る汁の残滓を探していた。

「全部、飲んでくれたんですね…、美味しかったですか…？」

思案するより早くソシエはこくと頷く。

それから慌てて思考を巡らす。

(ちゅうちゅうちゅう、ちゅうよ——！！)

もし飲まんかったら、クロバはん拒否したことになってしまうやろ…、

そしたらクロバはんまた傷ついて、立ち直れなくなってしまうやん…

そやから、うち、なんとか全部飲ん——)

懸命に自分で自分に言い訳をしていたソシエは両肩を掴まれ、畳の上に押し倒された。

ごつく、大きな手。

触れられた肩から、全身に広がっていくまたあの感覚。

男の手。

(またや、また、なにかが、うちの身体ん中を——……)

服をずらされ、乳房が露わになったが、ソシエは隠さなかった。

「もしかして俺のチンポを咥えただけで、感じたんですか——？」

クロバが何を言っているのか理解できない。

ソシエの思考は霧散してしまったようで形をなさず、身体は、息苦しさ心地良い火照りの中にあっ
た。

「ひゃっ——うっ、んっ——」

乳房を揉みしだかれ、ソシエの口から甘い声が漏れる。

じれったい、もっと強く——、突起を——……

「んっ、はう…ひんんう……」

クロバが覆い被さってきた。

肌が密着し、汗で滑る。

いつのまにかクロバも服を脱いでいたのに気付く。

分厚い胸板が、乳房を押しつぶす。

「はあっ——はあっ——、クロバはあん……」

ソシエは求められるままに舌を出し、絡ませた。

クロバの巨軀の下で、ソシエの白い身体がくねくねと蠢く。

胸、背、腰、腿と、体中をまさぐっていたクロバの手が内股へ——、やがて股間へと伸び、陰唇に触
れる。ソシエのそこは既に下着ごと、ぐっしょりと濡れていた。

お漏らしでもしたように見えるそれは汗でも尿でもなく、ソシエの肉体が知らぬ間に溢れさせた愛液だ
った。その激しい濡れ方にクロバは思わず唇の端で笑った。

下着を剥ぎ、穴に触れると、そこはクロバの太い指を何の抵抗もなく飲み込んだ。

親指でクリを強めに捏ねる。

「ひううっ——んっ——」

「前戯は、不要いらなそうですね（笑）」

クロバが内腿を掴んで押すと、ソシエはなんの抵抗もせず股を開いた。
フェラの射精からすでに回復し、ガチガチに硬直した陰茎の先端を、ソシエの膣口に当てる。

「ふううん…、はあっ、はあっ…、クロバはあん……」

「ソシエさん、挿れるよ？」

「クロバはあん……」

その時にはもう、一度は思考を混濁させたソシエも、今何が起きているのか、そしてこれから何が起ころうとしているのかを、正しく理解していた。

先ほど、口いっぱいに犯したあの巨大なモノを、今度はあそこに挿れようとしているのだ。

「クロバはあん……」

「クロバはあん……」

ソシエは甘い声でクロバの名を呼ぶ。

しかしそれは決して挿入を許したわけではない。

『あかんよ、やめてっ、いやいや、だめ——』

ソシエの喉元には、それらの制止の言葉が大挙して出かかっているのだが——、

その時になってもまだ、ソシエはクロバを拒絶する言葉を告げることを躊躇い、他に言える言葉を思いつかないがために、ただただ名前を呼んでいるだけなのだった。

（あかんよ——、クロバはんっ、そんだけなあかんよ——、）

「クロバはあん……」

「ソシエさんっ……」

「クロバはあん……」

「ソシエさんっ……」

ソシエが拒絶の言葉を押し殺したために、それはまるで恋人たちが求め合うがごとく、互いの名前を呼び合い続けているようだった。

クロバが腰を進め、その真っ黒な陰茎がソシエの膣肉を押し拵げ、呑み込まれていく——。

ぬぢゅっ——

ずぷぷっ——

ずにゆにゆずにゅっ——

「はぁううんっ—————！！」

ソシエは身体を激しく仰け反らした。

痛みはなかった。

初めての経験ではあったが、以前、ユエルとお互いの性器の見せ合いっこをしたとき、処女膜が殆どないことを確認している。

激しい舞の練習や戦闘で、擦り切れ無くなってしまったようだった。

クロバがゆっくりと抽送を始めると、ソシエはその綺麗な顔を歪め、激しく喘ぎ始めた。

それは正常位での挿入だったが、エルーンであるソシエには巨大な尻尾があるため、お少し尻を浮かせての挿入になる。更にクロバの陰茎の激しい上反りも相まって、クロバの亀頭はまだ開発されていないソシエのGスポットを完全に直撃していた。

「あ`あ`あ`あ`—————」

あかん、いやや——、いまだなお、拒絶の言葉を呑み込むソシエの意識は、遠くから静かにやってきた、しかし今となっては怒濤の濁流となって荒れ狂う快樂の波に飲まれようとしていた。

「ああああんっ、あああっ、はぁあんっ——」

突かれる度に迸る快樂。

確実に絶頂へと追いやられていく肉体。

体中を駆け巡る痺れる感覚に、ソシエは自分の身体がこの——巨大な男性器の挿入を待ち望んでいたのだと気づいた。

「はぁあんっ、あんっ、あんっ、あんっ、あああっ♡ ——んぐぐうう？！！！」

さして防音設備もない宿の一室だというのに、淫蕩に喘ぐソシエの口を、クロバは思わず手で塞いだ。そしてそのまま腰を振り続ける。

「ふぐっ、んんっ——、んぐうう、んんんんっ—————」

畳に擦れる背の痛みは心地良かったが、圧迫される尾骨の痛みには耐えきれず、ソシエは身体を捻じった。やがてそれは後背位へと変わる。

その間にクロバは服を全て取り払い、2人とも全裸になっていた。

腰を掴んだ後背位から口を塞ぐのは難しいため、ソシエには自分の手で口を塞がせた。

ずちゅっ———ずぶっ———ずぶっ———ずぶっ———

「ソシエさんのまんこ、すげえ気持ちいいよ———」

「んんっ———んんっ———んんっ———うううっっ———！！」

「ソシエさんはどう？俺のチンポ気持ちいい？」

「うううっ———ううっ———」

ソシエは自分の手で口を覆ったまま激しく首を横に振る。

途端、止まった腰振りに、ソシエは慌てて首を縦に振った。

パンッ———パンッ———パンッ———パンッ———

噴出した汗にまみれた腿と尻肉がぶつかる度、部屋に炸裂音が響く。

「ソシエさん、俺のちんぼ気持ちいい？」

ちんぼ気持ちいいって言って？」

クロバは背後から覆い被さり、口を塞ぐソシエの手をどかして耳元で囁く。

ソシエはただ首を横に振った。

「……………いい……………、はあんん、あんっ……………、いい……………、お……………、いい……………♡」

ひとしきり待ってはみたものの、ソシエの性格ではその卑猥な言葉を口にするのは難しいようだった。

クロバは諦めてソシエの手を口に戻すと腰を掴んでラストスパートへと入る。

パンッ———

パンッ———

パンッ———

パンッ———

「あくっ———んっ———くうんっ———♡」

「出るっ——出る出る——、出すよ、ソシエさんの中につ——」

ソシエは必死に首を横に振っていたが、クロバには見えていない。

(あかんっ——、それだけはあかんよ——、クロバはん——、あかんよおおっ——!!!)

ソシエは頭の中ではそう、叫び続けているものの、口から飛び出す大きな喘ぎを押さえるのが精一杯で、とても膣内射精から逃げる余裕はなかった。

びゅるっ——

腹の中に熱い液体が迸る。

「うっ——くうう——くうう——!!!」

ソシエは体中が弾けるのを感じた。

同時に意識が真っ白になり——……、ただただ、気持ちいい、という1つの言葉に支配された。

びゅるっ——どびゅっ——どびゅっ——どびゅっ——どびゅっ——

膣内に何度も精液を注がれ、ソシエはその度に身体を震わせて応えた。

「ひぎいい——！」

突然、尻尾を掴み上げられ、下半身が浮く。

尾骨に激しい痛みを感じたが、途端に、その痛みが快樂へと変わる。

ずちゅっ——ぬちゅっ——

クロバは抜かず、再び腰を振り始める。

「まっ……クロっ……はあうん、うくうう——、くううう——」

最早、勝手に下半身を使われてるような気がしたが、抵抗はできず、もう一度膣内に精を受けた。

もう一度。

それから体位を変えてもう一度。

ソシエも何度も絶頂に達して、ようやく性交に慣れはじめ、僅かに余裕を見せ始めた。

今は対面座位で繋がり、クロバと舌を絡ませながら繋がっている。

『今度はソシエさんが動いてみて』と言われ、彼の上で懸命に腰を振る。

体中が汗にまみれた2人は宿の温泉へと行って、誰もいないことをいいことに、そこでもまた繋がった。部屋に帰る途中、トイレの中で啜えた。

部屋に戻ると食器が綺麗に片づけられ、布団が敷かれていた。

2人は布団の上で再び繋がった。

今はクロバのものが、ソシエのアナルに入っていた。

「ああ、イクぞッ——」

「待って、クロバはん、ようちびっとまって……！！」

「無理っ、ソシエさんのケツ穴最高すぎて、持たないっっ…」

アナル性交。

ソシエにとって尻穴での性交自体、とんでもないことだったが、結局拒否できぬまま挿れられてしまった。しかし実際に挿れられてみると、最初こそ気持ち悪かったものの、前穴とは違った感じに良く、こちらももう少し続けていれば何かが掴めそうな感覚があった。

今は立ち上がったクロバに抱えられ、ソシエは身体を丸めるようにしてアナル差し出し、繋がっている。クロバの巨軀と筋肉にとって、ソシエの体重はほとんど問題にはならないようだった。

(待って——、クロバはんっ、あと、よう、ちびっとで——)

「はうん、あんっ、あんっ、あんっ——♡」

「イクよ、ソシエさんっ、イクイク——」

不意に、絶頂に上りつめようとしたクロバの射精感が引込んだ。

クロバは首をかしげ、若干不自然な呼吸をしながら、再び、絶頂へと向かい腰を振り始める。

壺之舞・玉串^{たまぐし}————

ソシエは繋がったままその能力を発揮していた。

それはスロウと呼ばれる遅延効果を持つ能力であり、つまるところクロバの射精を少し遅らせた、ということである。

そしてついに肛門性交の気持ち良さを掴み、クロバの射精と共に絶頂を迎える。

「ううっ——ソシエさんっ、今度こそっ、いくうっ——」

「ああああっ——、いいっ、ああああっ——……♡♡♡」

びくっ——

びくっ——

びくんっ——

「あああ……♡」

尻の奥に精を受け、ソシエは恍惚に酔いしれた。

膣とアナルで絶頂、その気持ち良さを始めて知ったソシエは、ユエルにも教えてあげたいとふと思った。しかし、恋人でもない、初対面の男としてしまったことは、とても言えそうにない。

もし——、自分が精液を飲んだと告げたら、彼女は一体どんな顔をするだろうか——。

「はあ——、ぐっ…、はあっ——はあっ——、」

荒い息を吐き、急速に硬さが失われつつある陰茎をソシエのアナルから抜こうとしたクロバに、ソシエはぎゅっと抱きついた。

「あかんっ——、クロバはん……」

「んっ…？ はあっ…はあっ…」

「もういっぺん……」

「ソシエさん……??」

「お尻に……、もういっぺん……、おくれやす……」

「えっ……、、」

クロバは既に数え切れないほど射精している。

しかしソシエが始めて見せたおねだりに股間が反応し、ソシエの尻の中で再び硬度を取り戻す。

「ああっ♡ ああっ♡ ああっ、あんっあんっ——♡」

「ソシエさん、ケツ穴ですもの、気に入ったの？」

「クロバはんっ、前もええよっ、あんっ、いいよ、うち好きやわぁ…、クロバはんのち……んこ…♡」

「うおおっ——……！！」

ソシエが漏らした淫語にクロバは叫び、激しく腰を突き上げソシエのアナルを犯した。
ソシエは一足先にアナルで絶頂し、クロバの耳元で囁く。

「クロバはん、やっぱり前に……、」

「えっ…」

「うちのオメコン中に…出して…♡ クロバはんの、せーえき……♡」

クロバはアナルから引き抜きマンコへと挿れ換える。
ソシエの尻尾はまるで射精を促すかのように、無意識のうちにクロバの陰囊を撫で、叩いていた。

「はぁっ——はぁっ——はぁっ——」

「んっ、ほうん、あんっ♡ あんっ……♡」

「イクよ、ソシエさんっっ——！！」

「ほうんっっ♡ イクッイクッ——♡」

ビュルッ——

ビュルッ——

ドピュッ——……

(もっと、もっと、あと、一回だけえ——……)

ソシエは身体を痙攣させながら、尻を振って抽送を促す。

いまだ絶頂の最中にいるのであろう…、
クロバはソシエがもっと欲しがっていることに気づきはしたが——、男と女では違う。

「ソシエさん、もう……、はぁっ、はぁっ、

少し休まないで…連続はむっ——……」

その時、クロバは自分のイチモツがガチガチに硬くなるのを感じた。

「うおっ——！？」

射精したばかりでもう無理と断言した直後の射精感。

クロバはただ、衝動に突き動かされるままに腰を振り、ソシエの中に再び射精した。

「あああぁっ————……、、、、」

2人の意識は真っ白に染まった。

納曾利^{なそり}の儀——、そして陸之舞^{きから}・逆羅。

それはソシエだからこそ到達できた、まさに秘奥と言える技の名である。

そして癒之舞^{しんわ}・心和。

これは逆羅で繋がった仲間の体力を回復し、傷を癒やし、そして奥義^{しゅせい}ゲージを即座に100%回復させることができる。

ソシエは無意識のうちにクロバと納曾利の儀を通じ、連続射精を可能にさせたのであった。

奇しくもこれこそが、ソシエとクロバの連携がとれるようになったことの証であった。

2人は体液と汗でびしょりと濡れた布団の上に、へとへとになって倒れてこんでいた。

既に深夜を過ぎ、もう数刻で朝日が登る時間になっていた。

2人は夕食から何時間ものずっと、ただひたすらセックスをし続けていたのだった。

「ぐおおお……、ぐうう……」

すぐ隣では、疲れ果てたクロバのいびきが聞こえてきた。

「クロバはあん……………、、

ちゃうんよ……、そないゆー意味ほな、なくてええ……………♡」

癒やしてあげると言ったのは自分だが、それは性的にではなく、もっと健全な意味合いで——、というのを、ソシエは今更ながらに口にした。

無論、クロバは既に寝入っていてその言葉は届いていない。

ソシエが布団の上でびくりと身体を震わせると、その秘所と菊座からクロバが出した精液がどろりと溢れた。

風呂に入る体力も気力も無く、ソシエもまた、そのまま眠りに落ちた。

クロバは煌々と室内を照らす太陽の光に顔を歪めた。
頭を搔き、周囲を見回し、状況把握に努める。
部屋中に体液の匂いが、むんむんと立ちこめていた。

すぐ隣ではソシエが一糸纏わぬ姿で、俯せで寝ていた。

その姿に、昨夜のことの全てを思い出す――。

クロバは大きく伸びをすると、隣で寝ているソシエの尻尾に手を伸ばした。
大きな尻尾を持ち上げると、ぷりんとした白い尻が朝の日に照らされる。
ソシエの尻は小ぶりで、綺麗で、真っ白――だが、ところどころ昨日打ち付け合ったことで赤くなっているのが見て取れた。

クロバは朝勃ちの陰茎が、更にギビギビに硬直するのを感じた。
陰唇を開き、試しに指を入れると膣中はまだぐっしりと滑っていた。
クロバは手に唾を吐いて、自分の陰茎に塗すと、俯せで寝ているソシエに後ろから挿入した。

ぐじゅっ―――ぢゅぷっ―――

「はっう、うあ……んっ、クロバはあん……ちがうん……ちがうんよお……♡」

抵抗はない。

彼女は、何かが違う違うと言っているようだが、まだ夢の中にいるようだ。

寝バックで突くたび上がるソシエの呻きが、クロバの性感を刺激し、射精感はすぐにやってきた。

ドピュ——ビュルッ——ビュルッ——ビュルッ——

「んっ…んっ…クロバはあん…だ……、ち、ちがうんよお…」

朝一番の膣内射精。

ガチガチの朝勃ちを気持ちよく処理できたことに、クロバは深い満足感を覚えた。

が、しかし、当の息子はまだ満足していないようだった。

流石にもう無理、と思うのだが、何か重要なことを忘れているような——、そんな、感覚。

クロバは俯せで寝ているソシエの背をじっと見つめた。

映るは、朝日に照らされた、とても綺麗な、白く、細い、背。

(そうかっ——！！)

クロバは合点がいったと手を叩き、尻尾を尻の方へ戻すと、ソシエの背中を露わにした。

そしてその前で自らの陰茎を扱き始める。

寝顔は見えないが、綺麗な耳、流れる髪、細い肩、はみ出す横乳、揺れる尻尾——、そして背。

眼前にあるそれら全てをオカズに登りつめる。

「うっ——！！」

どくんっ——

どびゅ——

どびゅ——

ビュビュ——

びゅるるるッ——

クロバは呻き、ありったけの精液を、ソシエの白い背中へとぶっかけた。

(はあっ——、はあっ——、

あはは…あははっ… もう散々出したのに、まだこれだけ出るのか——！！

自分のキンタマながらすげえなあ——！！)

濁液に滑った背は、高潔な日の光を、淫靡な光へと変えた。

『ザーメンまみれのソシエの背。』

クロバはその光景を脳裏に焼き付けておこうと思った。

(はあっ——、ふう……、思う存分ぶっかけて、やっとスッキリしたぜ……
ソシエさん……、
エルーンの服って背中丸出しで、まじエロすぎなんだよ……。
こちとら、ずっとご無沙汰で、視界に入るたび勃起させられるもんだから、
昨日は、なかなか前に出られねえし、まともに動くことすらままならなくて……)

クロバは寝ているソシエをひっくり返し、形の良い乳房をなぶった。

ソシエはびくっとして、一度は腕で胸を守ろうとしたが、クロバが片方の手で腕をどけると、あとはされるがままになっていた。

美しく、とても可愛い寝顔だった。

(そういや昨日は顔射をしなかったな——…、
まあ、この辺境の島に次の連絡艇がくるまでかなりの日がある——
ふふっ、この美しいエルーンの肉体をしゃぶり尽くすには十分な時間だ——)

ソシエの乳房の感触を楽しみながら、クロバはにんまりと笑った。

まあ、それはそれとして、そのためにはまず騎空士としての仕事をこなさなければならない。

「ソシエさんっ、起きてくれ！
汗を流して、出発の準備を始めよう！
早く魔物を倒さなくては住民たちが——！！！」
「んっ…んんう……、、、」
「ソシエさんっ…、起きて……早く魔物を倒す準備を……」

クロバはソシエの乳首を引っ張ったり弾いてみたりしたが、ソシエはなかなか起きなかった。

ねえ、早く魔物をぶっ倒して——…

青姦と洒落込みましょうよ、ソシエさ———ん！！

おしまい。

=====
あとがきんたま：

今回、一番苦労したんはソシエはんの口調どす…（大阪弁+京都弁？）。

そもそもうち東夷方言しかわかりまへんし…、

ご依頼を受け、書き始めてから「アカン、これソシエはん口調無理やったなあ」と気付おいやしたやけど後ん祭りどした。せやのでおかしなところは適宜、脳内補完しておくれやす。

ご依頼まんことおおきに。

ソシエ
2021.12